平成30年度　全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　柄杓田　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語，算数，理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語，算数，理科）

主として「知識」に関する問題（A）	主として「活用」に関する問題（B）
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

⑵　児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

⑴ 全国・本市の学力調査（国語A・B，算数A・B，理科）の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

⑵ 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	国語科における各領域において、基礎的基本的な内容の確実な定着が見られた。
	よくできた問題	漢字を正しく書いたり、読んだりする問題について正答率が高かった。また、自分の想像したことを物語に表現するために、文章全体の構成の効果を考える問題についての正答率も高かった。
	努力が必要な問題	文の中における主語と述語の関係などに注意して、文を正しく書く問題について課題が見られた。

国語B	全体的な傾向や特徴など	活用する力は、全体的に身についている。
	よくできた問題	話合いの参加者として、質問の意図を捉えたり、計画的に話し合うために、司会の役割について捉える問題について正答率が高かった。また、目的や意図に応じて、文章全体の構成の効果を考える問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く問題について課題が見られた。

算数A	全体的な傾向や特徴など	知識･技能の確実な定着をさらに高める必要がある。無回答の問題はなかった。
	よくできた問題	異種の二つの量のうち、一方の量がそろっているときの混み具合の比べ方を考える問題の正答率が高かった。180°の角の大きさを問う問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	小数の除法の意味や円周率の意味について考える問題について課題が見られた。

算数B	全体的な傾向や特徴など	課題解決のため、活用する力を高める必要がある。無回答の問題はなかった。
	よくできた問題	示された情報を解釈し、条件に合う時間を求めたり、折り紙の枚数が100枚あれば足りる理由を、示された数量を関連づけ根拠を明確にして記述したりできる問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	メモの情報とグラフを関連づけ、総数や変化に着目していることを解釈し、それを記述する問題について課題が見られた。

理科	全体的な傾向や特徴など	特に理科的な知識に関する内容の定着が見られた。無回答の問題はなかった。
	よくできた問題	骨と骨のつなぎ目について、科学的な言葉や概念を理解したり、人の腕が曲る仕組みを模型に適用したりする問題についての正答率が高かった。
	努力が必要な問題	土地の侵食について、予想が確かめられた場合に得られる成果を見通して実験を構想したり、実験結果から言えることだけに言及した内容に改善し、その内容を記述したりできる問題に課題が見られた。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
・児童全員が、将来の夢や目標を持っていると答えている。また、人の役に立つ人間になりたいと考えている。教育活動全体を通して、それぞれのよさをさらに認め、自尊感情や自己肯定感を高めていくようにする。 ・地域や社会で起こっている問題や出来事に関心をもっている反面、地域や社会をよくするために何をすべきかを考える児童は少ない。日々の授業や活動の中で自ら課題を見つけ考え、自分なりに解決していく実践力を身に付けるようにしていく。 ・算数科に対する興味関心が低い。算数科に対する興味関心を高めていくような授業改善や指導方法の工夫を図っていく。 ・理科に対する興味関心が高い。さらに身近な事物・現象に積極的に関わるような授業づくりを工夫していく。 ・家庭学習において、全員が必ず学校の宿題をしている。1日の学習時間が1時間以上の児童の割合を増やしていきたい。 ・児童全員が毎日朝食を食べ、決まった時間に起床・就寝している。規則正しい生活をすることができ、基本的な生活習慣が身に付いている。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組（全校で・学年で・学級で）

・主題研修において豊かな言語活動の創造をめざし、授業研究を行い、その成果を実践に生かす。
・スクールプランをもとに、授業改善を進め、1時間の授業の中に話し合う活動と書く活動を必ず取り入れる。
・学校全体で揃えていくところを柄杓田スタンダード（板書、掲示物等）として作成していく。

② 家庭生活習慣等に関する取組

・毎週、全児童に配布する生活ふりかえりカードをもとに家庭との連携を図りながら、よりよい生活習慣や読書習慣、家庭学習の定着を図る。
・PTA総会や学校だよりなどで、学力向上に関わる取り組みについて保護者への周知を図る。